

球技における戦術的行動についての研究(1)

—サッカーのサポートについて—

榊 原 潔*・土 田 了 輔*

(平成10年10月30日受理)

要 旨

球技のゲームに共通する特徴は、ゲームの状況が複雑でしかも常に変化するところにある。プレーヤーは、それぞれの状況の中で最適なプレーを選択、発揮する戦術能力が要求される。攻撃戦術の課題解決のために、ボールを持たないプレーヤーは重要な役割を果たしている。本研究では、ボールを持たないプレーヤーの動きの中で、パスを受けるまでの動きに着目し、パスを受けるプレーヤーのサポートの方法について、サッカーの一流チームのプレーヤーの実際のゲームを対象として分析を行った。

その結果、以下のことが明かとなった。①パスナーは、ルック・アップでレシーバーを確認してからパスをしている。②パスナーのルック・アップ時を手がかりにした3区間毎にレシーバーの動きを観察するとサポートの方法が捉えやすい。③実際のゲームの中では、ルック・アップ時にレシーバーが立ち止まる場合が観察できる。④パスナーのルック・アップやレシーバーのボールを受けるまでの動きは、一流プレーヤーが共通に行っていることで、意図的な攻撃に必要な個人の能力である。

KEY WORDS

tactical movement	戦術的行動	supporting	サポート
off the ball	ボールなし (の動き)	look up	ルック・アップ
passer	パスナー	receiver	レシーバー

1. 緒 言

球技では、チームの競技力を構成する要因として技術、戦術、体力、精神力が挙げられる⁽¹²⁾。球技のゲームに共通する特徴は、ゲームの状況が複雑で、しかも常に変化するところにある⁽⁵⁾。プレーヤーは、それぞれの状況の中で最適なプレーを選択、発揮する能力が要求される。そのため、単にボール扱いが巧みであることと、その巧みなボール扱いをゲームの中で有効に発揮できること、の間には大きな差異がある。この差異は戦術能力に因るところが大きいと考えられ、ゲームの状況に応じて最適なプレーヤーや技術を使いこなす方法を習得する必要がある⁽⁸⁾⁽¹³⁾。サッカー、バスケットボール、バレーボールなど学校体育で扱われる球技では、戦術学習を学習の中核に据える必要がある、との指摘もある⁽⁷⁾。

戦術は、更に個人戦術・グループ戦術・チーム戦術、攻撃戦術・守備戦術に分けて捉えられ

ている。サッカーやバスケットボールの攻撃戦術を考える際には、1) 防御ラインを破る、2) 人数的優位をつくる、3) 空間的優位をつくる、という共通の課題がある⁽²⁾。これらの課題解決のために、ボールを持たないプレーヤーは重要な役割を果たしている。サッカーでは、90分の試合時間のうち1人当りのボールを扱える時間は平均で2,3分であり、残りの80分以上は守備や攻撃時のボールなしでのプレーである⁽¹⁵⁾。ボールを持たないプレーヤーが、防御ラインを破りノーマークになる、相手守備者よりも早くボール保持者をサポートし、オーバーナンバーをつくる、相手守備者を引きつけオープンスペースをつくることは、意図的な攻撃のために重要である。しかし、これまでにボールを持たないプレーヤーを対象とした研究は少なく⁽³⁾、重要性を指摘するに留まっている⁽¹⁰⁾。

本研究では、ボールを持たないプレーヤーの動きの中で、パスを受けるまでの動きに着目し、パスを受けるプレーヤーがどのようにパスを受けるに至ったか、つまりサポートの方法について、サッカーの一流チームのプレーヤーの実際のゲームを対象として分析を行った。

2. 研究 方 法

パスを出すプレーヤーをパサー、パスを受けるプレーヤーをレシーバーと呼ぶ。

2. 1 パサーの運動経過について

本研究の目的はレシーバーのパスを受ける前の動きを明らかにすることである。しかし、パスは出し手であるパサーと受手であるレシーバーの、出したいスペースやタイミングと受けたスペースやタイミングが一致して初めて意図的なパスとなる。そこで、まずパサーがパスを出すまでの動作を観察し、パサーがパスを出す運動経過を明らかにしようとした。

ビデオテープに収録した1998- 99年ヨーロッパチャンピオンズリーグ、バイエルン・ミュンヘン対マンチェスター・ユナイテッドのテレビ映像の中で、味方から味方へパスが繋がった場面を分析対象とした。

ビデオテープを再生しながらパサーの印象分析⁽⁴⁾を行った。その中で、代表的な場面を抽出しパサーの運動経過及びプレーヤーの配置の変化を記録した。さらに、記録した資料をもとにパサーの動作や見ている方向の特徴を整理し、レシーバーの動きを観察するための区間を設定した。テレビ映像からは、プレーヤーがどこを見ているのかは観察することができない。従って、顔の向きからプレーヤーの見ている方向を推測した。

2. 2 レシーバーのボールを受けるまでの動きについて

テレビ映像では、ボール周辺の映像が中心となるため、レシーバーのボールを受ける前の動きが撮影されていない場合がある。そこで、パサーの動作を観察した場面の中で、パサーがボールを受ける前の段階から、レシーバーの動きが観察できるものを分析対象とした。

ビデオテープを再生しながら、研究方法2.1で得られた区間毎にレシーバーの動作の印象分析を行った。その中で、代表的な場面を抽出しレシーバーの運動経過及びプレーヤーの配置の変化を記録した。さらに、記録した資料をもとにレシーバーの動作や見ている方向の特徴を整理し、サポートの方法をまとめた。テレビ映像からは、プレーヤーがどこを見ているのかは観察

することができない。従って、顔の向きからプレーヤーの見ている方向を推測した。

2. 3 1試合を通じたレシーバーの動作の分類について

ビデオテープに収録した第16回 FIFA ワールドカップフランス大会決勝、フランス対ブラジルのテレビ映像の中の味方から味方へのパスの場面を分析対象とした。

ビデオテープを再生しながら、研究方法2.1で得られた区間毎にレシーバーの動作の印象分析を行った。レシーバーの動作は、「動いている」、「立ち止まっている」の2通りに分類した。また、撮影されていない場合は不明とした。レシーバーの動きは、そのスピードをもとに、スプリント、クルージング、ジョギング、歩行(ウォーキング)に分類されるが⁽¹⁾、ビデオテープの観察ではこれらの正確な判定は困難である。そこで、場所を移動している場合を一括して「動いている」とした。また、静止、ステップを踏む、方向を変えるなどその場から移動しない場合を「立ち止まっている」と分類した。ボールを受ける際にボールに寄る(meet the ball)こと、は基本であるといわれている⁽¹¹⁾。したがって、ボールに寄る動きと受けたいスペースに動いてボールを受けたのを区別して分類した。静止している状態から、ボールに寄った場合は、「立ち止まっている」に分類した。

3. 結果と考察

3. 1 パスを出すプレーヤー(パサー)の運動経過

図1-aは、パサーがボールを受けるプレーヤー(レシーバー)にパスするまでを表したものである。場面Aでは、ドリブルしながら顔は前方を向いている。場面Bでは、ドリブルのスピードを落とし、身体の向きを変え、顔はレシーバー方向を向きレシーバーを確認できる状態にある。場面Cでは、パスをするためにインサイドキックの動作にはいり、顔はボール方向を向いている。場面Dでは、前方に向かってポジションを移動している。

図1-bの場面Aでは、相手と競り合いながらボールをトラップし、顔はボール方向を向いている。場面Bでは、横にドリブルしながら、顔はレシーバー方向を向きレシーバーを確認できる状態にある。場面Cでは、パスをするためにアウトサイドキックの動作にはいり、顔はボール方向を向いている。場面Dでは、前方に向かってポジションを移動している。

図2の場面Aでは、浮き球をトラップするためにボールの落下点に入り、顔はボール方向を向いている。場面Bでは、ボールをトラップし、顔はレシーバー方向を向きレシーバーを確認できる状態にある。場面Cでは、パスをするためにインサイドキックの動作にはいり、顔はボール方向を向いている。場面Dでは、前方に向かってポジションを移動している。

図3の場面Aでは、ゴロのボールを受けるためにボールに寄り、顔はボール方向を向いている。場面Bでは、ボールのコースに入りながら、顔はレシーバー方向を向きボールとレシーバーを同時に確認できる状態にある。場面Cでは、パスをするためにインサイドキックの動作にはいり、顔はボール方向を向いている。

図4の場面Aでは、ボールを受けるために立ち止まり、顔はボール方向を向いている。場面Bでは、ボールのコースに入りながら、顔は右方向を向きレシーバーを確認できる状態にある。場面Cでは、パスをするためにインサイドキックの動作にはいり、顔はボール方向を向いてい

る。場面Dでは、前方に向かってポジションを移動している。

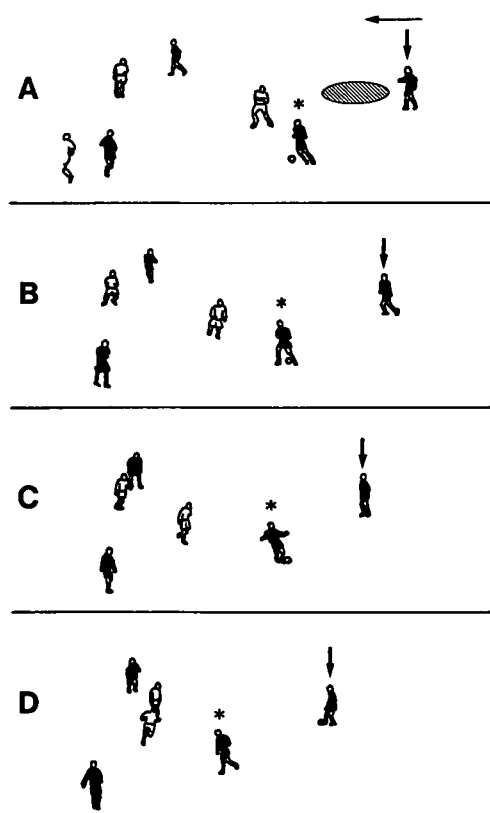


図1-a パサーとレシーバーの運動経過
(ドリブルからパス+寄るサポート)
*：パサー，↓：レシーバー

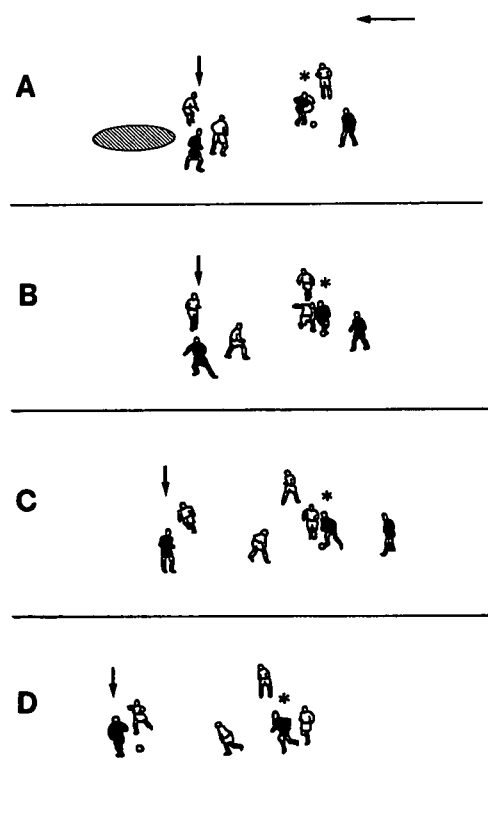


図1-b パサーとレシーバーの運動経過
(ドリブルからパス+離れるサポート)
*：パサー，↓：レシーバー

図1-a, bはドリブル後にパス，図2は浮き球をトラップしてからパス，図3はゴロのパスをトラップしてからパス，図4はゴロのパスをトラップせずにパス（ワンタッチパス）とそれぞれ状況は異なるが，動作と顔の向いている方向は，場面毎に特徴をまとめることができる。

動作の特徴は，以下のようにまとめることができる。

場面A：ドリブルまたはボールを受けるためにボールのコースに入る。

場面B：ドリブルまたはトラップやボールのコースに入りボールをコントロールする。

場面C：キック。

場面D：ポジションを移動する。

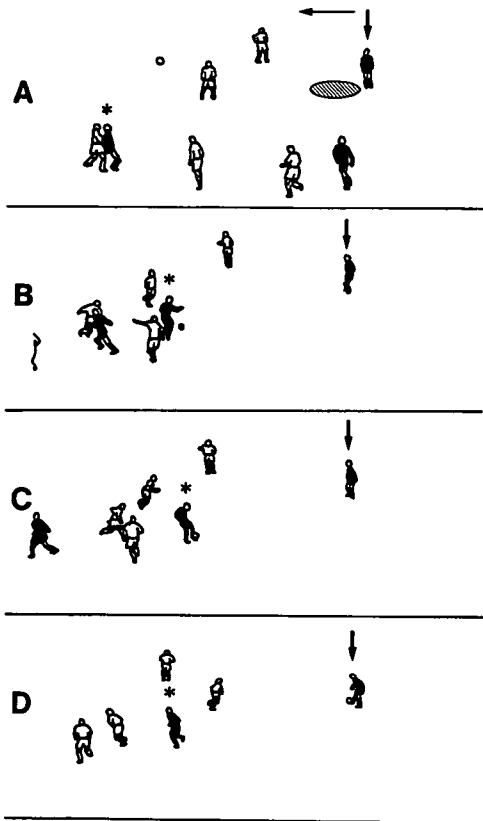


図2 パサーとレシーバーの運動経過
(トラップからパス+動く必要のないサポート)
* : パサー, ↓ : レシーバー

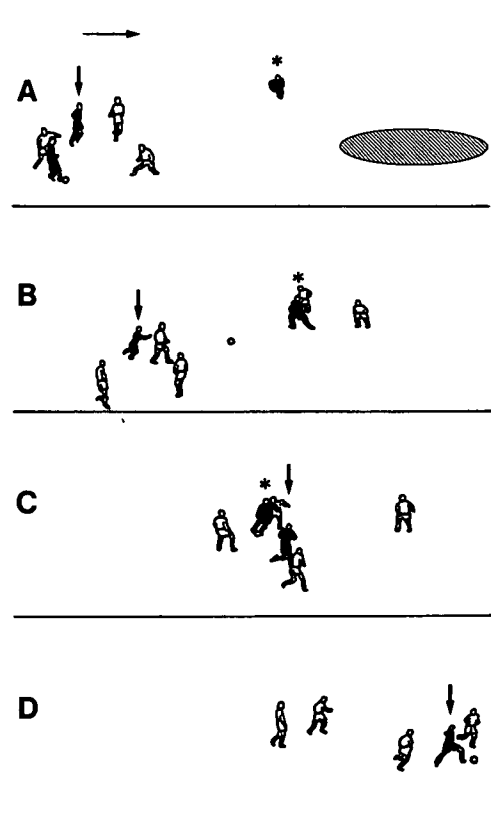


図3 パサーとレシーバーの運動経過
(トラップからパス+追越すサポート)
* : パサー, ↓ : レシーバー

また、顔の向きの特徴は、以下のようにまとめることができる。

場面A：ドリブルの場合を除き、ボールを受けるためにボール方向を向いている。

場面B：レシーバーが確認できる方向を向いている。

場面C：キックをするために、ボール方向を向いている。

場面D：ボールや前方が確認できる方向を向いている。

場面Bのように、パサーがボールをコントロールするために顔をボール方向に向けていたところから、レシーバーが確認できる方向を向くことをルック・アップ (look up) と称している⁽¹⁴⁾。また、オフト⁽⁹⁾は「戦術を実行する上で、その出発点になるのが、アイ・コンタクト (Eye-contact) である。」と述べている。アイ・コンタクトは、ルック・アップし、良い視野を確保することによってなされることが、指導指針にも述べられている⁽⁶⁾。今回の分析から、技能レベ

ルの高いプレーヤーがパスを出す際に客観的に観察できるほどのルック・アップをしていることが、パスを出すまでの運動経過からも明かになった。

従って、パサーのルック・アップ時がレシーバーの動きを観察する上で重要な手がかりになると考え、以下の区間を設定することとした。

区間 a) パサーが「ルックアップする前」

区間 b) パサーが「ルックアップしている時」から「パスをするためにボールを見るまで」

区間 c) パサーが「パスをするためにボールを見ている時」からレシーバーが「ボールを受けるまで」

3. 2 ボールを受けるプレーヤー（レシーバー）の動き

図1-aは、パサーがレシーバーにパスするまでを表したものである。場面A～Bが区間a、場面B～Cが区間b、場面C～Dが区間cに該当する。区間aでは、ジョギングで攻撃方向へ

前進しながらボールに寄る。

顔はパサー方向を向いているが、後方にも顔を向け、自分の後方も確認している。区間bでは、ジョギングから立ち止まり、顔はパサー方向を向いている。足元のスペースでボールを受けたい意思を示したと考えられる。区間cでは、ボールに合わせてステップしトラップの態勢に入る。顔はボール方向を向いている。パサーに寄るサポートである。

図1-b区間aでは、その場に立ち止まり、顔はパサー方向を向いている。区間bでは、受けるスペースの手前までスプリントし、そこでまた立ち止まる。顔はパサー方向を向いている。前方のスペースでボールを受けたい意思を示し、さらに攻撃方向に背を向けてしまわないよう受けたいスペースの手前で立ち止まったと考えられる。区間cでは、ボールのスピードに合わせてスペースに走り込み、ボールを止めずにパスができ

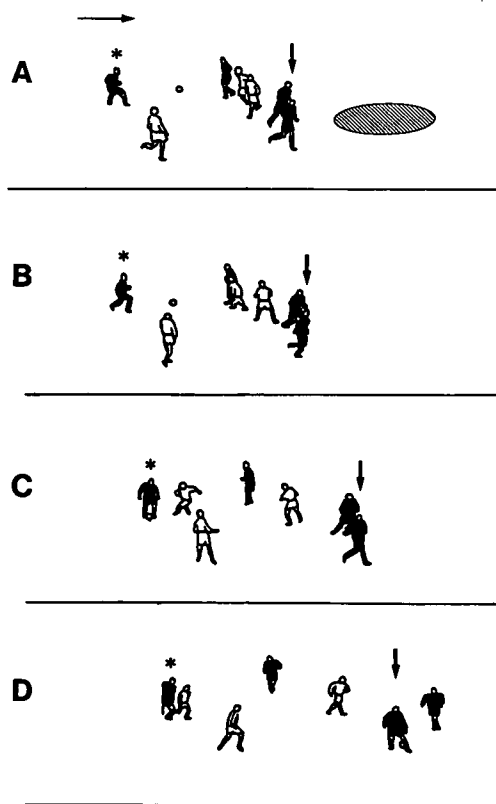


図4 パサーとレシーバーの運動経過
(ワンタッチパス+離れるサポート)

*: パサー, ↓: レシーバー

る態勢になる。ボールを受ける前に顔は前方を向いている。パサーから離れるサポートである。

図2の区間aでは、その場で身体の向きを攻撃するゴール方向に変えている。顔はパサー方向を向いているが、右方向にも顔を向け状況を確認している。区間bでは、その場に立ち止まり、顔はパサー方向を向いている。足元のスペースでボールを受けたい意思を示したと考えられる。区間cでは、ボールに合わせてステップシトラップの態勢に入る。顔はボール方向を向いている。動く必要のないサポートである。

図3の区間aでは、ジョギングで攻撃方向へ前進し、ボールから離れて行く。顔はパサー方向を向いている。区間bでは、受けるスペースへ向かってスプリントし、顔はパサー方向を向いている。前方のスペースでボールを受けたい意思を示したと考えられる。区間cでは、そのままスプリントを続け、スピードに乗った状態でトラップしている。顔はボール方向を向いている。パサーを追い越すサポートである。

図4の区間aでは、ジョギングで攻撃方向へ前進し、ボールから離れて行く。顔はパサー方向を向いている。区間bでは、スピードを落とし、身体と顔をパサー方向に向けている。足元のスペースでボールを受けたい意思を示したと考えられる。区間cでは、ボールに合わせてステップシトラップの態勢に入る。顔はボール方向を向いている。パサーから離れるサポートである。

この5例だけでも、ボールを受ける前の動きは、区間を通じて同じ場合や区間毎に異なる場合がある。レシーバーが今いる所で有利にボールが受けられる場合は、その場に立ち止まり、今いる所で有利にボールが受けられない場合は、スペースへ動く傾向が見られる。このことは、指導書の中でも述べられている⁽¹⁵⁾。

このように、状況に応じてレシーバーの動きは異なるが、設定した3区間毎に動きを観察すると、サポートの方法が捉えやすいことが明かになった。

3. 3 1試合を通じたレシーバーの動きの分類

図5は、区間毎のレシーバーの動きを割合で示したものである。区間a, b, cを通じ、「動いている」場合の方が「立ち止まっている」場合よりも多い。区間a, bで不明が多いのは、

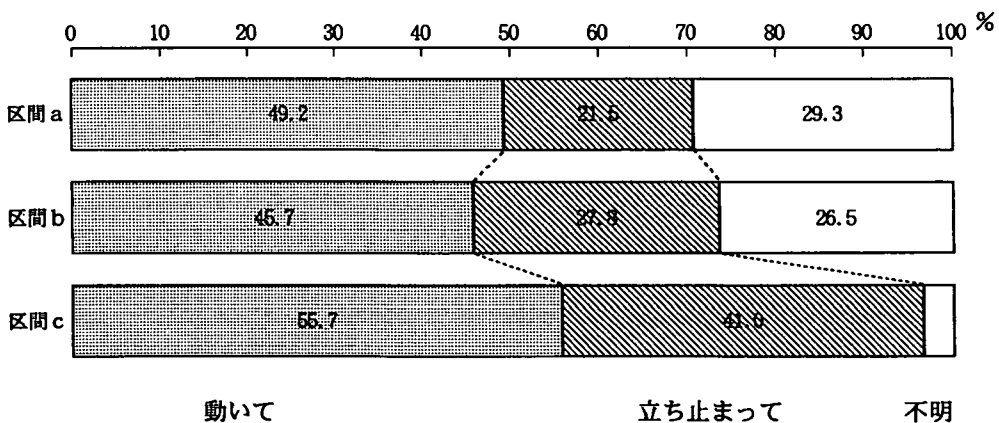


図5 区間毎のレシーバーの動き

テレビカメラではボール周辺を中心に撮影するため、ボールを受ける前のレシーバーの動きが捉えられていないためである。また、区間cでは、パスからレシーバーの足元へ速いパスが渡った場合、区間bに居た位置とほとんど変わらない。そのため、立ち止まってボールを受ける場合が多くなっている。

表1は、区間毎のレシーバーの動きの変化を示したものである。3区間を通じて「動いている」場合がもっとも多い。b区間で動いていた場合はc区間でも動いてボールを受け、b区間で立ち止まった場合には、c区間でも立ち止まってボールを受ける場合が多い。

表1 区間毎のレシーバーの動きの変化

区間 a → 区間 b		→ 区間 c		
		Move	Stay	?
Move → Move	195	137	58	0
Stay → Move	62	36	23	3
→ Move	257	173	81	3
Move → Stay	93	29	64	0
Stay → Stay	71	14	57	0
→ Stay	164	43	121	0

Move=「動いて」、Stay=「立ち止まって」、?=「不明」(単位：回)

これらのことは指導書等でも指摘している⁽¹⁵⁾⁽⁶⁾ように、パスのルック・アップに合わせてレシーバーが動き出したり、動きの方向やスピードを変化させる場合が多いことを表している。そして、更にパスのルック・アップに合わせてレシーバーが立ち止まり、アイ・コンタクトをする場合があることが明かとなった。

4. ま と め

技能レベルの高いプレーヤーのゲーム中のパスを出すまでの動作、及びボールを受けるまでの動きをビデオ映像をもとに分析した結果、以下のことが明かとなった。

1. パサーは、ルック・アップでレシーバーを確認してからパスをしている。
2. パサーのルック・アップ時を手がかりにした3区間毎にレシーバーの動きを観察するとサポートの方法が捉えやすい。
3. 実際のゲームではレシーバーは、パスのルック・アップ時に動き出す場合だけでなく、ルック・アップ時に立ち止まる場合が観察できる。
4. パサーのルック・アップやレシーバーのボールを受けるまでの動きは、チームの勝敗に関わりなく、技能レベルの高いプレーヤーに共通する、サッカーの意図的な攻撃に必要

な個人の能力である。

文 献

- (1) 浅見俊雄ほか(1981)スポーツの科学研究レビューシリーズ1. 新体育社:東京, pp. 186-200.
- (2) ケルン(Kern, J.): 朝岡正雄ほか監訳(1998)スポーツの戦術入門. 大修館書店:東京, pp. 39-40.
- (3) 久保田哲司(1998)体育授業におけるバスケットボールのゲーム評価に関する研究. 上越教育大学大学院修士課程修士論文:55-102.
- (4) マイネル(Meinel, K.): 金子明友訳(1994)マイネル・スポーツ運動学(9版). 大修館書店:東京, pp.452-453.
- (5) 中川 昭(1996)ボール運動が上手になるための学習. 金子明友監修, 教師のための運動学—運動指導の実践理論—. 大修館書店:東京, pp.239-245.
- (6) 日本サッカー協会(1998)強化指導指針1998年度版. JFA news 増刊号(166):73.
- (7) 岡出美則(1986)体育科教育からみたスポーツの戦術—教科内容としての戦術とその指導—. 体育の科学 44(7):507-510.
- (8) 大西武三(1994)ボールゲームの戦術—ハンドボールを例にして—. 体育の科学44(7):502-506.
- (9) オフト(Ooft, M. J.): 大原裕志訳(1994)COACHING ハンス・オフトのサッカー学. 小学館:東京, pp.62-65.
- (10) 佐藤 靖(1997)球技の分類を考える. 体育科教育 45(17):26-29.
- (11) ウェイド(Wade, A.): 浅見俊雄訳(1980)イングランドサッカー教程. ベースボール・マガジン社:東京, pp.96-97.
- (12) 山中邦夫ほか(1985)サッカーのゲームにおけるチーム力の評価に関する研究(I). 筑波大学大学体育研究 7:41-49.
- (13) 山中邦夫(1986)サッカーゲームにおけるチーム戦術(戦法)とシステム—1992-1993 日本代表チームの分析から—. 体育の科学 44(7):534-544.
- (14) 湯浅健二(1995)闘うサッカー理論—勝つための戦術とチームマネージャー—. 三交社:東京, pp.33-40.
- (15) 前掲書, pp.55-69.

A Study on the Tactical Movement in the Ball Games (1) — Supporting in Soccer —

Kiyoshi SAKAKIBARA* · Ryosuke TSUCHIDA*

ABSTRACT

The situation of games was complicate and usually changing in the ball games. Players were required tactics to select and play properly at all situations. The player without ball was important to solve problems at the attacking situations.

The purpose of this study was to make clear the supporting movement of receiver during off the ball.

The results can be summarized as follows:

- 1) Skilled players showed remarkable "look up" before watching the ball to pass the ball to the receiver.
- 2) Three periods , - before "look up" , "look up" - before watch the ball and watch the ball - receive the ball , was effective to observe the supporting movement of receiver.
- 3) The receivers were not only moving but staying when the passer showed "look up".
- 4) "Look up" of passer and supporting movement of receiver during off the ball were important ability for creative soccer players.

* Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education:
Department of Health and Physical Education